

納西族民俗調査報告(1)

松岡 正子※

本稿は、雲南省麗江納西族自治県太安郷の汝寒坪村、天紅村、花音村において、1995年の3月3日から7日までと同年9月11日から16日まで行った2回のナシ族民俗調査の記録である。

A. 太安郷

日時：1995年3月3日、太安郷人民政府

話者：張汝林（37歳，男，漢族，太安郷書記） 王元恒（40歳，男，漢族・太安郷副書記）

太安郷は、麗江県城から南へ40数キロの山間部に位置する。海拔高度は2450～3200メートル。6つの行政村と42の自然村、67の合作社からなる。総戸数は1850戸、総人口は8311人で、1戸あたりの平均の家族数は4.5人。住民のほとんどはナシ族であるが、プミ族が62戸と螳螂人が少数いる。

6つの行政村の戸数、人口、民族構成、海拔高度はつぎのようである。海西村は214戸、985人で、全員がナシ族、海拔は2500m。太安村は471戸、2037人で、全員がナシ族、海拔は2800m。郷内でも最も大きい行政村で、郷政府が置かれている。天紅村は382戸、1662人で、全員がナシ族、海拔は2900m。吉子村は242戸、1066人で、海拔は2700m。全員ナシ族となっているが、一部の祖先は漢族である。百年程前に20戸の漢族が四川から移住してきて、現地のナシ族と通婚し、ナシ族になった現在も漢語を話せる老人が97人いる。沙南化村は369戸、1648人で、ナシ族が307戸、プミ族が62戸いる。このプミ族は700年前は蒙古族であったといい、ナシ族とは共住せず、自分たちの集落をつくっている。海拔は2500m。紅麦村は172戸、913人で、ほとんどがナシ族であるが、イ族系の古い民族集団である螳螂人がいる。海拔は2450m。

太安郷の中で最も古い歴史をもつのは、汝南化村の海棠自然村である。およそ13代、約350年の歴史をもつと伝えられており、およそ明代以降に、この一帯への移住が始まったと考えられる。

B. 雲南省麗江納西族自治県太安郷汝寒坪自然村

日時：1995年3月3日～7日、9月12日～14日

話者：楊輝金（30歳，男，村長） 和成順（81歳，男，東巴） 和国柱（62歳，男，東巴）

和国良（56歳，男，東巴） 楊作林（74歳，男，東巴）

楊鴻章（53歳，男，元天紅小学校長） 楊自就（52歳，女） 全員ナシ族

※鶴見大学非常勤講師

1. 概況

・村の景観：汝寒坪村は、麗江の県城から南へ約50キロ、歩いておよそ8時間ほどの山あいにある。海拔高度の平均は3100メートル。盆地状の緩やかな斜面には、ほぼ中央を公道が南北に走る。公道をはさんだ西側には、4つの家屋群が南北に約1キロの範囲で並ぶ。北から順に1社、2社、3社、4社である。家屋群のさらに西には「山地」（山林を開いて造った畑）と森林が続く。2社の上手には小学校がある。そこはかつて「三朶廟」のあった処である。小学校からさらに斜面を上ると湧き水がある。村の水源である。1972年には政府の援助を受けてそこから水道管を引き、小学校の下手の広場に共同の貯水地と水汲み場を造った。畑は、家屋群を囲むようにあたり一面に開かれ、主にジャガイモが栽培されている。公道の東側は緩やかな丘である。丘の中腹には火葬場がある。火葬場の少し下には和家の墓がある。和家の一部は土葬を行っている。解放前、村の周囲は豊かな森林であった。しかし解放後の大躍進の頃から、耕地を開くためという名目で樹木の伐採が盛んに行われた。あちこちに残る、樹木の生えない荒れ地がかつてのそのことを物語っている。現在、村内の森林の総面積は約4500畝で、そのうち1500畝が「集体林」（村有）である。

・自然条件：4月中旬から10月下旬までは雨季である。11月20日を過ぎると霜が降りる。12月には雪がふり始め、4月頃まで続く。6～7月が最も暑く、最高気温は18～20度位、最も寒いのは12～1月で、零下3度位まで下がる。

・村は総戸数が131戸、総人口が532人で、男性と女性の数はほぼ同数である（1994年）。4つの合作社（集落）からなる。1社（後村）は38戸で143人、2社（中村）は31戸で128人、3社（海救村）は41戸で151人、4社（海救村）は21戸で110人である。4つの集落の中では、中村が最も古い。全員ナシ族である。

・1戸当たりの家族数は、1社が3.8人、2社が4.2人、3社が3.7人、4社が5.2人である。家族構成は、夫婦と子供からなる nuclear family や夫婦と一組の息子の家族からなる stem family の型が多い。それは、複数の兄弟がいる場合には、結婚した順に分家していくという習慣が続けられているからである。

・村内には和と楊の2つの姓があり、和姓が約80%、楊姓が約20%を占める。和姓のほうが古い。楊姓には大楊と小楊の区別がある。和成順によれば、和姓は汝南化村から移ってきた。汝南化村には11代、275年以上いた。成順から5代前の祖先が汝寒坪一帯は水が良いことを知り、移ってきた。また楊作林によれば、大楊姓も、当地が水と土地に恵まれてることを知り、4戸と一緒に汝南化村から移ってきた。その時すでにここには和姓がいた。小楊の一族は1900年代半ば頃にこの地に移ってきた。

・ナシ族は伝統的に火葬を行っており、各族は固有の火葬場をもつ。当地では、公路の東側の山腹にある火葬場に和姓、大楊、小楊の姓がそれぞれの場所をもっており、遺体は必ず各族の場所で茶毘に付される。昔、成順の弟の一人は火葬場のある丘のふもとで、他の数組の男女とともに心中した。心中した者を一族の火葬場で焼くことはできない。

2. 1940年代以前の暮らし（月は農曆）

・民国6年（1917）の頃から10数年間、村では毎年、流行性感冒がはやり、60人以上が死亡して、8戸が途絶えた。1940年代になってようやく下火になった。当時、村の総戸数は67戸、総人口は276人であった。

・民国28年から34年まで（1939-1945）の5、6年間、毎年雹の害が続き、ずっと作物の収穫ができなかった。住民は土地や家屋、家畜などを売って食料を手に入れた。売る物がなくなると農業や放牧の手伝い、家屋の建築、木工などの仕事を求めて近隣の富裕な村に出稼ぎに出た。村全体のおよそ3分の1の家が村外へ出稼ぎに行った。

・当時、村に和波、楊守、和狗の3人の地主がいた。和波家は、6人家族で、家屋が2軒あり、1軒は家族の住居、もう1軒は家畜と養蜂用であった。「肥田」が40～50畝、「山地」が320畝あり、牛2頭と馬2匹、綿羊30匹、ブタ10頭を飼っていた。養蜂の樽は7～8個あった。1個の樽からは約10キロの蜂蜜が生産できた。一人の長工と50～60人の短工がいた。和成順は長工として解放時までおよそ16年間和家にいた。食と住はただであったが、16年間の報酬は38枚の服だけだった。短工には毎日3度の食事がだされ、報酬として蜂蜜2斤と家畜用の蔓青の葉莖、燕麦1升（約4斤）、家屋用の麻の茎30～40斤が支給された。楊守家は5人家族で、家屋が1軒、肥田が80畝、山地が400畝あり、耕牛が2頭、綿羊が50匹、ブタ10数頭いた。短工は年に300人ほどであった。和狗家は、6人家族で、家屋が1軒、肥田が60畝、山地が280畝あり、耕牛が2頭、綿羊が50匹、ブタが10頭いた。短工は毎年80人位であった。当時、村全体で肥田が600畝と山地2000畝あったが、地主の3家族（総人口の6%）の肥田の32%、山地の50%を所有していた。

・民国時代、行政上は「保甲制」で、保長と甲長がいた。保長と甲長は村の「郷規民約」が守られるように、住民の中から比較的厳格な性格の者を選んで「nyugua」（監視員）とした。それはだいたい一年で交替した。「郷規民約」とは森林や土地の管理、金銭や物品の貸借、治安などについての習慣法である。違反した者には「罰酒」が課された。「罰酒」とは9月9日の村の集会に30斤の酒を用意することである。

・森林についての規約：村の水源である山の湧き水一帯は「封山」地区とされ、樹木を伐採することはできない。大刀や斧、シャベル類を封山区に持ち込んではならない。各家はそれぞれ山林を私有しているが、他人の山林にかってに入ることにはできない。

・土地についての規約：土地の環境線には「頭石」（界石或いは子石）は2本ないしは3本立てであるが、これを勝手に動かしてはならない。他人の土地へはブタが草を食べるために入るとは許されるが、犁牛で畑地を耕している時はいけない。他人の犁を勝手に使用することはできない。土地を売買する時には、甲長に証人になってもらわなければならない。土地を借りる場合は、収穫量の3分の1を借り代とする。金銭を借りる時は土地を担保とする。子供が分家する時には、族長が土地を分配する。ここでいう「族」とは6～10戸を一つの単位とした親戚関係である。

・道路や溜め池など公共の工事についての規約：毎年、各戸は男性の成人の労働力を3人分供出しなければならない。ただし一人分の労働力は4斤の米で代替できる。

・治安についての規約：窃盗は、もし証拠があれば捕まえて打ちすえる。盗んだ物の値打ちによっては金銭や土地で償う。

・9月9日には、村全体の集会が開かれる。「郷規民約」に関する取決めが話し合われ、その年の違反者が「罰酒」を行う。また公有のテントや太鼓、銅鑼などの一年間の貸借が清算される。各戸は「大洋」半塊を供出する。酒を準備し、牛を殺して共食する。

・楊作林によれば、村全体で行う祭りは4月8日の求雨のための「祭山神」、6月25日の「趕鬼」（火把節？）、9月9日の「重陽節」である。1年分として各戸から米3碗と香油1瓶、ブタ肉1条を集め、それを3等分して使う。

・4月8日の「求雨」はつぎのようである。朝、火葬場の大樹の処で山神を祭る。「三朶廟」内に安置されている6つの大神像、4つの小神像、一羽の鶯像のうち2つの大神像を山上の池の側の小屋に運ぶ。その場で住民は各自線香をもやし、叩頭する。太鼓を打って神に求雨する。食事を作り、皆で食べる。各戸は燃料用の松の枝を1本づつ持つて行く。ひしゃくで山上の池の水を汲んで、干上がってしまった村内の池や溝にその水を注ぐ。

・4月8日は「祭署神」である。全社が一緒に廟で行く。ブタ肉を供物にすることはできない。各族の東巴が集まり、輪を描いて踊る。祭壇の前で玉龍山に向かって「開門大吉」と唱え、線香をもやす。祭壇には銭や酒、茶の入った碗を盆に並べて置く。木で作った三脚の上に、1本の木を横にかける。雄鶏の鶏冠から血を取って、梁の15本にそれをこすりつける。さらに経文を唱え、東・南・西・北・中央の各方向の柱をそれぞれ白・緑・黒・黄・花（模様）に染めよと念ずる。

・春節の9、10、11日にも全村で「三朶祭り」を行う。三朶神像を廟から順番に各社に運ぶ。1社（后村）が9日、2社（中村）が11日、3・4社（海救村）が10日である。各社には神像を運ぶかごがあり、それは普段は廟に置かれている。各社の当番の家の門口には小屋が造られており、神像はそこに一晩安置される。儀式では、経が読まれ、2個の海貝を投げてその年の吉凶を占う。海貝は表と裏が黒白になっており、投げ出された二面が白黒であれば吉、白白或いは黒黒であれば凶である。紅麦村から招いた2人の男性の螳螂人（道士）が踊りを舞う。当番の家の主人が供物をささげ、線香をもやす。供物はまず「生」、それから「熟」である。庭には宴席を設ける。各戸から一人ずつ出席して食事する。さらに6つの碗に鶏卵やはるさめ、もちなどを入れ、村内の交叉路まで運んで、カラスに食べさせる。カラスが食べればその年は吉である。

・6月25日の「趕鬼」には、東巴を招く。一つの碗に、炒った粉で三角錐型につくった供物「朶馬」を入れる。別の碗には生の鶏卵を入れる。東巴は「竹叉」や「板鈴」を持ち、碗を手に持って、経文を唱える。

・和国柱によれば、毎年、春節の9、10、11日と2月8～13日に全村あげての祭りをを行う。2月の祭りは初めの3日が神迎えで、後の3日が神送りである。村は1社、2社、3社と4社の3つに分かれて、廟内の「三朶神」像をそれぞれのかごで各社に運び、当番の家で祀る。当番の順はくじで決める。表裏が黒と白の海貝を2個ふって、黒白の組み合わせを出した者が勝ちで当番である。最後に三朶神祭りをしたのは民国38年（1949）であった。

・2月8日は各家でも三朶神祭りを行った。庭に玉龍山に向かって祭壇を作り、供物を置く。家畜を殺して供え（始めが「生」で、後に「熟」）、線香をたいて叩頭する。主人或いは招かれた東巴が經文を読む。家々での祭りは50年代以降中断されていたが、89年から個人的に復活している（著者は1995年2月に和国柱家で参観した）。山で放牧をする者は、その日、山上で鶏を殺し、香をたいて東巴經を唱え、玉龍山を拝する。玉龍山は三朶神の化身であり、代々ナシ族人民を守ってきたのだと伝えられている。

・廟は、民国26年（1937）に住民から資金を募って建てた。もともとはそこに2本の大木があって靈驗あらたかという評判がたち、近隣から多くの人々が参拝に来ていたことによる。後に、雨が降った時には不便だという理由で廟を建てることになった。紅麦村から螳螂人の道士を招いて風水をみてもらい、廟の場所を決めた。その2本の大木は現在もある。住民によれば、それは神樹であるから伐ることはできないのである。

・廟には「三朶神」が祀られた。「三朶神」の像は柏樹で作られていた。その周囲には2人の妻と6人の弟子、三朶神を背負う者が1人、門を守る者が2人、鷹を持つ者1人の木像が並べられていた。

・廟は、解放後の1950年に一部が破壊され、文化大革命の時に再び壊された。再建したいという希望も出ているが、資金不足のためとうぶん無理だという。

3. 1950年代以降の暮らし

・解放後は、1953年に土地改革が行われ、一人当たり1.9畝の肥田が分配された。54年には互助組が作られ、56年には合作社ができた。58年に人民公社が組織された。この頃、栽培作物には大きな変化があった。政府の農科所が、従来の大麻にかえて白雲豆と新品種のジャガイモの栽培を奨励したのである。人民公社の時代にはこれらの大規模な栽培が行われた。しかし1958年頃から気候にめぐまれず、新品種の作物の収穫は激減した。そのためひどい食料不足となり、住民は飢えに苦しんだ。

・1965年、県城から大理方面に向かう公路と村を結ぶ公道約9キロが通じ、村から車で県城に行けるようになった。以前は、県城まで山道を歩いておよそ8時間かかった。72年には拉市から村に電気が引かれた。またその年に、山の水源から水道管を引き、村内に貯水池と水汲み場を作った。工事費用は政府からの援助が4～5万元と住民が3万元を供出した。82年には村の南端に発電所ができた。

・1983年、生産請負制が導入された。人民公社は解体され、一人当たり5畝の畑が分配された。現在も主要な生業は農業である。重要な経済作物はジャガイモと白雲豆であり、肥田のほとんどでこれが栽培されている。ジャガイモと白雲豆は、一部を米と交換して主食とし、残りを売って現金収入を得、消費にあてる。純収入はかつてに比べて格段に増加しているとみられる。しかし経済価値の高い白雲豆については、海拔高度が2000メートルを越えているために収穫量や品質が海拔高度の低い近隣の花衣村のそれに比べて劣っている。そのためかつては両村の間には経済的

にほとんど格差がなかったのに、近年は総じて花衣村の方がかなり富裕である。

・1980年から90年までの10年間に、家族単位で村から外地へ移住した例はなく、入ってきた例もない。

・村外で働いている村出身者：教師3人、供銷社3人、迪慶州教育部1人、林業局1人、地質局1人、迪慶州副州長1人、部隊団級幹部1人、太安郷政府2人、麗江県党委1人、大理州部隊指導員1人など。

・「計画生育」（人口制限政策）：ここでは一組の夫妻に子供は2人まで許されている。3人目からは1千元から1万元或いは5万元までの罰金が課せられる。この2、3年は「超生」（生みすぎ）の事例はない。

4. 村の経済

・村の耕地の総面積は2650畝（1畝は約6.67アール）で、一人当たりの平均は5畝である。耕地には「肥田」（定畑）と「山地」（開墾地）の2種類がある。「肥田」では主にジャガイモを作り、間作として白雲豆を植える。ジャガイモと白雲豆はともに解放後に政府の奨励を受けて栽培され始めたが、現在では重要な換金作物となっている。解放前の主作物は大麻であった。大麻は油用に種を売り、茎から糸をよって衣服を作った。「山地」では燕麦と蕎麦などが栽培される。農業暦はつぎのようである（月は農曆）。ジャガイモは3月にうえて8～9月に収穫する。畑を耕すのは2、7、11月で、尿素やリンなどの化学肥料や堆肥をいれる。白雲豆は清明節の頃に植えて10月に収穫する。燕麦は2月にうえて8月半ば或いは10月に収穫する。

・各作物の作付け面積は、ジャガイモが1500畝で全体の約56.7%を占める。以下、燕麦が300畝、苦蕎麦が300畝、白雲豆が150畝、蔓青が200畝となっている。1畝当たりの生産量は、ジャガイモが3500～4000斤（1斤は500グラム）ある。これは解放前のその約1.5倍、山地のナシ族と似た自然条件の中で暮らしている四川のチャン族のそれと比較すると2倍以上ある。以下、1畝当たりの収穫高は、燕麦が80斤、苦蕎麦が600斤、白雲豆が150斤である。

・汝寒坪は食料を自給自足している村ではない。1950年代を境に、それ以前は大麻、以後はジャガイモと白雲豆を、穀物（特に米）と交換して食料にあててきた。主食はついていえば、かつては雑穀が主であったが近年は飯米である。1994年度は、ジャガイモは1斤あたり0.26元（1元は約12円）、白雲豆は1斤あたり1.20円で、1斤あたり1.25元の飯米と、それぞれ5：1、1：1の割合で交換する。なおジャガイモと白雲豆は一部を米と交換し、残りは売って現金収入とする。燕麦、苦蕎麦、蔓青は「山地」で輪作し、自家用として主に家畜の餌にする。

・家畜は、黄牛が292頭で、2戸で2～3頭共有することが多い。現在もなお2頭の牛で一本の犁を引く「二牛抬杠」という耕法が行われているためである。綿羊は1戸あたり平均15匹飼われているが、近年は人手不足から売る者も多い。毛や皮を衣服や敷物の原料とし、かつては糞を燃料にした。ブタは1戸あたり平均7～8頭で、自家食用にしたり、売って現金収入を得る。大ブタは1頭500～600元、小ブタは1頭70～80元であった（1994年）。

・農業税は穀物1斤につき1.04円で、1戸あたり平均25元。家族数が多く、収穫高が多くなればなるほど税は増える。1994年度は、最も多く支払った家では200元を越えた。

・村内には、トラクターが20台あり、すべて個人所有である。作物の運搬や街に出る時に使われる。自家で使用するばかりでなく、所有していない家に貸し出す。W. K家では毎月15日くらい他家に貸し出しており、1日につき50元で月に750元の副収入になる。

・テレビは1977年に初めて集団用として村に入ってきた。1990年からは個人の購入が始まり、現在は全部で33台、カラーが1台、白黒が32台で、普及率は約25%である。

5. 教育

・民国24年(1935)、村の富裕な数軒の家が、麗江県白沙から教師を招いて和文光家で私塾を開いた。学生は男子が7～8人で、教科書には『三字経』や『百家姓』を用い、授業はナシ語で行われた。1年から3年までであった。教師の給料は招いた数軒の家が負担し、学生は飯米や肉、油を納めた。民国34年(1945)、全村で飯米や肉、油を徴収して、廟で学校を開いた。教師の報酬は「大洋」の半分であった。1950年、学生が増えたために再び和家に学校を移し、共産党政府が派遣した張という者が教師に迎えられた。給料は政府が支給した。授業はナシ語と漢語で行われ、教科書は政府支給のものを使用した。51年に再び学校は廟に移された。72年には1年生から5年生までである「完小」となり、先生は5人いた。文化大革命中に廟が破壊され、74年に廟の跡地に新しい学校が建てられた。先生は3人(うち女性が1人)で、みな「公辦」(政府から正式に採用された者で、民辦より給料などの待遇がよい)であった。学生は100人。クラスは1年生から4年生までで、年に2回の長期休みがあった。現在は教師が4人で、男性2人と女性2人。2人は師範学校卒業で、1人は工農兵大学卒業(村出身)、この3人が公辦で、1人が民辦である。

・入学率は87年から100%である。それ以前の平均は93～98%で、貧しいために来れない者がいた。学生は、雑費を各学期15元、年間30元、電気代として2元負担する。進級率は100%で、卒業率は90%。

・中学校への進学率は10%、卒業率は67～74%。学費は各学期400元で、雑費として25～30元、最低でも18元必要である。

・漢語の普及について：解放後、漢族が土地工作隊として村に入ってきた。村では頻繁に集会が開かれて住民が動員され、共産党の宣伝が行われた。住民は漢語を耳にする機会が増え、漢語を学び始めた。71年には、漢語による共産党の全村向けの放送が始まった。当時はナシ語による宣伝放送も行われており、住民は理解しやすいナシ語の放送を好んだ。全村向けの放送は、文化大革命後の76年からなくなった。

・71年に村に電話がひかれた。74年から村でも新聞がたのめるようになった。テレビは77年に村有として1台買われた。90年から個人の購入が始まり、現在は33台で、普及率は約25%である。

6. 個人の事例 — 家族と経済 —

〔I〕和成順（81歳）の場合

(1) 家族

・家族構成は、妻の和習敏（64歳、郷内の天紅村出身）と息子の和国宣（52歳）及びその妻の和建新（47歳、郷内の花音村出身）、4人の孫娘の阿秀（24歳）、阿玉（22歳）、阿英（20歳）、阿海（18歳）の8人である。妻の習敏は後妻で、1963年に自由恋愛で結ばれた。前妻は郷内の花音村出身で、親が決めた相手である。孫娘はみな未婚で、阿秀は太安中学卒業後、村内の小学校で「民辨教師」を3年勤めている。給料は月80円で、学生の成績によって奨励金がでる。阿玉は、中学卒業後、家で農業をしていたが、最近、安徽省に出稼ぎに行った。安徽省に嫁いだ村出身の2人の女性が村に戻ってきて若い女性を誘ったのである。阿玉は友人とともに村を出、そこで結婚相手を見つけるつもりでいる。阿英は中学卒業後農業をし、阿海は中学1年生である。

・和成順が5、6歳の頃、全村で流行性感冒がはやり、両親はそれが原因で、8歳の時に父が、9歳で母が亡くなった。葬式をだすために家や家畜、畑を売った。葬式は吉子郷から7～8人の東巴を招き、牛、ヤギ、ブタを殺して4日間行った。さらに1年後に再び東巴を招いて儀式を行った。9歳から25歳（1939）まで、叔父の和波の家で「長工」となった。16年間で与えられた物は、毎日の食住と38枚の衣服だけだった。その後、天紅村から移ってきた和玉才に木匠としての技術を学び、花衣村（当地から5キロ）や天紅村（当地から2.5キロ）で家の修築などの仕事をした。木匠の工賃は1日で「大洋」1.5元だった。花衣の和徳の仲介で花衣出身の和世誠と一緒にになり、息子一人をもうけた。1940年代にはいり、電害が5～6年間続いた。農作物の収穫ができなくなったために、麗江の県城や周辺の豊かな村に柴や麻布を売りにいたり、農作業の手伝いに行った。

・叔父の和波は祖父、父と続いた代々の東巴であった。和成順は「長工」をしていた16年間、和波について「念」（経文を読む）、「跳」（儀式で躍る）、東巴文字の習得などの修行をした。東巴は自分の一族内の儀式は行なわず、他族の東巴を招く。和成順は、解放前、婚姻、葬儀、子供の誕生と1か月目の祝いなどの儀式を行った。地主の家に招かれることが多かった。謝礼は酒1斤、米1升（4斤）、肉3斤1条、銭2元（銅銭10串45個、4串で1升の米が買えた）などであった。60年代には、郷内の太安や天紅、郷外の九河などの葬儀や、家畜の生育不順のための儀式を行った。日常生活では風水をみたり、家屋の方向や墓地の位置を占った。現在は年をとったので犁で畑を起こす日を決めるぐらいである。

・汝寒坪全体の80戸のうち（1994年の総戸数とはあわないが、和成順の意識の中ではこの数である）、和姓は約70戸で、楊姓は約10戸である。和姓はもともと1つの族で、互いの冠婚葬祭には必ず参加していたが、彼の祖父の代から分かれて、現在では15～6戸の親戚との往来が密である。

・1年間の行事をともに行う一族内の和家は31で戸である。一族内の行事としては、族内の老人が亡くなった後、毎年或いは一年おきと3年に一度、農曆2月1日、6月1日、11月1日に、自宅で線香をたき、酒や食物を供えて祀る。客を招くのは3年に1度の時である。春節の時には大晦日から元旦にかけてはよその家を訪ねない。元日になってから客を招きあう。清明節には、家

族ごとに墓参りをし、亡くなった先祖にむかって叩頭する。7月13、14日には紙銭を焼いて亡くなった者を弔う。8月15日には家庭で「蕎麦餅」を作る。

・祖父、父、和成順の各世代の関係はつぎのようである。祖父の和紳（ナシ名：阿普紳。彼らはナシ語名と漢語名をもつ。以下〔 〕内の名前はナシ語名）は和世雄（花衣村出身）と結婚して5男2女をもうけた。5男2女の婚姻状況はつぎのようである。①長男の和巴〔阿八〕は和成順の父で、妻の楊世牛（郷内の九河石紅山出身）との間に1男1女をもうけた。②次男は〔阿代〕、妻は楊世那（郷内の天紅村出身）で、1男1女をもうけた。息子は〔阿才〕、和成順より16歳年上で死去。その妻は〔阿玉、郷内の汝南化村出身〕で一男3女がいる。その1男3女のうち、長男が和国柱〔阿送〕である。③三男は〔阿凡〕、妻は〔阿潤、郷内の天紅村出身〕で二人とも早死にし、息子も夭折して一家は途絶えた。④四男は〔阿合〕、妻はリス族、1子をもうけたが夭折し、夫婦も死んで一家は途絶えた。⑤五男、〔阿六〕、22歳の頃、村の火葬場のある丘の麓で何組かの男女と共に「殉情」（心中）した。⑥長女は〔阿素〕、郷内の花音村に嫁いだ。⑦次女は夭折した

・輩字がある。和成順の世代からは「成」「国」「永」である。

(2) 家庭経済

・解放前、和成順の家は夫婦と息子の3人家族で、畑には大麻を3～4畝、ジャガイモを2畝栽培した。大麻の実は飯米と1.1：1の比率で交換した。鶴慶からペー族の馬幫が毎年来ていたが、中華人民共和国成立後こなくなった。49年当時で、1メートルの長さの大麻10本を一つにしたものを10こあわせて一把とし4～5角の値がついた。2畝の畑からは20把の大麻が生産され、60斤（1升＝4斤、約12キロ）の実がとれた。主食は雑穀が主だった。

・解放後、大麻の栽培面積が減り、ジャガイモが10畝に増えた。それは大麻を買い付ける馬幫が来なくなったこと、街に売りにいく余裕がなかったこと、大麻の畝当たりの生産量が低かったことなどによる。また大麻からとる油の代わりに藍花子や菜子も植えるようになった。菜子は肥えた土地で手間をかけて栽培しなければならなかったが、藍花子はどんな土地でもよかったため自家食用として次第に普及した。共産党政府下では、糧食部が農作物を買い付け、ジャガイモと飯米を5：1の比率で交換した。

・1994年の家庭経済はつぎのようであった。家には肥田が19畝と山地が48畝ある。肥田のうちジャガイモを16畝、間作として白雲豆を2畝、残りの3畝に蔓青と油菜を植えた。ジャガイモは60000斤を越える収穫があった。毎年30000斤を売り、残りを自家食用にする。1斤あたりの0.25～0.35円で売り（総額7500～10500元？）、12000斤を2400斤の米と換えた。白雲豆は400円で売れた。山地は1年使用したら2年休ませるという方法で、毎年16畝ずつ交替に燕麦を植える。1200斤の収穫があった。家畜は、綿羊が19匹、黄牛が1頭、ブタが8頭いる。牛についてはずっと和国良家と「牛親家」（2頭を共用する）の関係にある。ブタは去年「年猪」（正月用、1年分のタンパク質源になる）として3頭殺した。

・一家の収入は、農作物の売買で8000元～10000元前後あり、これに阿秀の給料約1000元が加わる。支出は、生産関係で種芋や肥料の購入、交際関係で村内や親戚間の冠婚葬祭用、日常の消費のために飯米や日用品の購入などで少なくとも5000元以上が必要であろうと推測される（聞き取りより）。

・なお農業暦はつぎのようである（月はすべて旧暦）。ジャガイモは3月に植えて8～9月に収穫する。2，7，11月に土を起こし、尿素やリンなどの肥料を入れる。去年は尿素とリンをそれぞれ200斤購入した。白雲豆は清明節の頃に植えて10月に収穫する。燕麦は山地に2月に植えて8月15日か10月に収穫する。肥料を少し入れる。

・解放前と後では、栽培作物が大きく変わった。かつてこの一帯では主に大麻を栽培していた。毎年11月と12月になると、鶴慶から「馬幫」が米を運んで来た。11月には大麻の実と、12月には蔓青と米を交換した。汝寒坪には「米は、作らないが食べられる」という言葉がある。住民は大麻という経済作物を栽培することによって、かなり以前から飯米を食べていたらしい。大麻の実と米の交換率は1：1であった。大麻の実は1ムーあたり約200斤の収穫があり、4斤の実から1斤の油が取れる。油は1斤8元だった。和成順の家では、1920年代、父母の彼の3人家族で10畝の畑があったが、1～2畝の畑に大麻を栽培して160斤ほどの収穫があり、家族の食料は基本的に足りていた。

・鶴慶の「馬幫」はペー族である。一人が2匹の馬を引き、1匹が120斤の米を運んだ。汝寒坪は馬用の草や飲料水、休む場所などの条件が良くなかったために「馬幫」隊の規模が小さく、一般には4，5人が10匹の馬を引いてくる程度であった。解放後、「馬幫」は次第に来なくなり、それとともに大麻の生産も減少した。

〔2〕和国柱（62歳）の場合。

（1）家族

・和国柱〔阿送〕は〔拉玉〕（52歳，木村出身）と結婚して、5男1女をもうけた。長男の和永光〔阿先，32歳〕は小学校卒で農民，妻〔阿清，32歳〕は和姓で高美古村出身，2人の息子がおり，隣に分家している。次男〔阿高，28歳〕は大專卒業後，麗江県第四中学校で教師をしている。妻の耀春玲（27歳）は不鼓村出身で，娘が一人いる。三男の和永勝〔阿紅，27歳〕は中学校卒で農民，現在は九河にある合原煤碛場で働いており，毎年，家に3000元仕送りしている。四男〔阿林，24歳〕は中学校卒で，農民，未婚で親と同居している。五男の〔阿軍，21歳〕は麗江県第四中学の学生で，教師の兄の家に同居している。長女の〔阿義，26歳〕は小学校卒で，1994年に九河の中古村に嫁いだ。

（2）経済

・肥田は1人あたり2畝で合わせて8畝，山地は1人あたり7畝で合わせて28～30畝ある。1994年の家庭経済の状況はつぎのようであった。農作物は，ジャガイモを12畝植えて70000斤の収穫

があった。一斤が0.15円で、収入は約10000元あった。また種イモを1斤0.15円で30000斤購入して栽培し、1斤当たり0.25円で売って30000元の収入があった。藍花子は3畝植えて270斤収穫し、油を自家食用とした。山地には燕麦10.5畝（収穫量は800斤）、苦蕎麦と甘蕎麦をそれぞれ0.5畝栽培し、家畜の飼料とした。ナタネは0.5畝で300斤収穫し、1斤当たり1.85畝栽培し、家畜の飼料とした。ナタネは0.5畝で300斤収穫し、1斤当たり1.8円で売って80000円の収入があった。家畜は黄牛が1頭で、和成順家とは牛親家の関係にあり。綿羊は3匹、ニワトリは17～18羽いる。ブタは94年に大ブタを3頭売って9000元、小ブタ12頭うって1200元、合わせて10200元を得た。このほか九河で働いている三男から30000元の仕送りがあった。またトラクターを1台所有しており、月に平均して15日、他家に貸し出す。貸し料は1日500円で、月に750000円の副収入がある。農業税は一人当たり18000円で、4人分で72000元であった。

〔3〕楊作林（74歳）の場合。

（1）家族

・最初の妻の和知（本村4社出身）は56年に45歳で息子を一人の残して病死した。2番目の妻の和妹は連れ子の娘を残して63年に病死した。長男の楊自華（43歳）は小学校卒で、1970年の18歳の時に雲南省開遠鉄路局に入り、現在は経理を担当している。その妻は漢族である。長女の楊自秀（43歳）は後妻の連れ子で、小学校は3年生まで通った。74年に本村3社の楊技効（43歳、小学校は4年生まで）に嫁いだ。楊作林は婿に自分の家屋を300000円で売り、娘夫婦の家族と同居している。娘夫婦には2人の息子がいる。長男の楊桂堂（20歳）と次男の楊桂忠（18歳）は共に太安中学の学生である。

・1940年代、楊作林の家は7人家族で、父の楊土と母の和潤、3人の妹と1人の弟がいた。長女の楊作嬢（66歳）は本村3社と和吉林（67歳）に嫁いだ。次女の楊作恵（63歳）は本村2社の和紹武（71歳、94年死去）に嫁いだ。三女の和作為（54歳）も本村2社の和国慶（53歳、94年に病死）に嫁いだ。和紹武は和国慶の父の弟である。作林の弟の作仁（51歳）は、本村3社の和叔金（56歳）と結婚した。

・楊作林の家は大楊に属し、代々、東巴である。曾祖父の楊義、祖父の楊雄、父の楊土、本人と継承し、作林は17～18歳から4年間学んだ。1940年代、全村には20数人の東巴がいた。それぞれみな伝来の東巴を引き継いだ者である。楊家の大東巴は楊東才である。長男の継青と次男の継春は1～2年間東巴の修行をした後、学校に入った。和家の大東巴は和波である。長男の成章、その子の国良へと引き継がれ、国良は6歳から学んだ。

・東巴は自分の一族の祭事は行わない。楊家の祭事は和家の東巴が行い、和家の祭事は楊家の東巴がしる。楊作林は94年には葬儀を2回行った。和紹武（74歳、妹の夫）と楊玉章（40数歳、小楊の一族）のである。

(2) 経済

・1940年代、家族は3間の部屋と庭のある平屋に住んでいた。耕地は肥田が12畝、山地が357畝(12件)あった。作物は、肥田に大麻やジャガイモ、蔓青を栽培し、山地に燕麦などを植えた。大麻は2畝植え、700斤の実(油用)を米と1:1の比率で交換した。また麻皮は長さ6尺、幅0.2尺のものを100本一組として、一組あたり10円で年平均800組を売り、80元(現在の約240元)の収入があった。このほかジャガイモは0.7畝で2000斤収穫し、自家食用とした。蔓青は4~5畝で16000とれ、飼料にした。燕麦は22畝で2400斤収穫し、一部を米と交換し、残りを自家食用にした。黒青稞は2畝で300斤、冬碗豆は3畝で360斤とれ、ブタの餌にした。家畜は耕牛が2頭、ヤギが20匹、ブタが2頭、母ブタが1頭、鶏が10羽いた。

・楊家では、災害の有無にかかわらず、常に誰かが出稼ぎに出ていた。父の楊土は拉市の楊土寄家で20数年間長工をした。当時すでに結婚しており、63歳(1947~48)の時に病気になってやっと家にもどり、そのまま死んだ。作林も14歳から大研鎮や金山などに働きに行き、短工などで日に5合(現在の約5元)稼いだ。当時は、全村の約3分の1の家から村外への出稼者がいた。

・1994年の経済状況はつぎのようである。耕地は肥田が9.7畝と山地が28畝である。作物は、ジャガイモを7畝栽培し、畝あたり3500斤で25000斤の収穫があった。ジャガイモは主に米や小麦と交換し、種イモ用に一部を貯蔵して残りを売った。米とジャガイモの交換率は1:5.5で、米1100斤をジャガイモ6050斤と交換した。小麦とジャガイモの交換率は1:4.3で、小麦800斤をジャガイモ3400斤で手に入れた。残りは種いも用に500斤を保存し、15050斤を1斤あたり0.24円で売り、約3600元の収入があった。また白雲豆を2畝植えて615斤収穫し、1斤1.3円で売って約800元の収入があった。このほか燕麦を7畝植えて500斤収穫し、飼料用にした。ナタネは0.5畝で50~60斤の収穫があり、40斤を1斤2円で売って残りを自家食用にした。大麻は1畝栽培して150斤収穫し、50斤を1斤あたり2円で売って100の収入があった。家畜は耕牛が2頭、ヤギが13頭、ブタが20数頭、鶏が10羽いる。またブタを1頭230円で売り、鶏を2羽65円で売った。



汝寒坪村の景観